



2年ぶりのGTPAルーキー・オブ・ザ・イヤー 最高の栄誉は誰の頭上に輝くか!

日本ゴルフトーナメント振興協会(GTPA)が選出・表彰する「GTPAルーキー・オブ・ザ・イヤー」。1998年に創設されたこの栄誉は、ゴルフトーナメント世界の活性化と若手選手の育成を目指し、これまで多くの選手に贈られてきた。そして、受賞した選手はいずれもトーナメントを牽引するトッププロに成長している。コロナ禍により今年は2年ぶりの選出となるが、ここまで目覚ましい活躍を見せている有力候補選手を紹介しよう。 ※記録は10月31日現在のものです



金谷拓実選手



古江彩佳選手



西村優菜選手

男子は東北福祉大出身の 2選手に注目

「GTPAルーキー・オブ・ザ・イヤー」は、レギュラーツアーに参戦し、最長2シーズン以内の選手に贈られる(選考基準詳細は別枠参照)もので、新人プロゴルファーにとっては大きな自信と励みにつながる栄誉だ。今回は2020-21シーズンも成績が著しく、なおかつ話題性、将来性、人間性に優れた選手が候補として挙がっている。

男子ツアーから見ていこう。

最初に名前が挙がるのは男子黄金世代エースともいえる金谷拓実だ。

広島県呉市出身。2015年の「日本アマ」を広島国際学院高2年時の17歳51日という史上最年少で制覇し、世にその名を知らしめた。東北福祉大在学中の19年には、アマチュアとして「マスターズ」と「全英オープン」の出場権を獲

得し、そのマスターズでは予選通過も果たした。同年8月には世界アマチュアランキング1位にも輝き、日本人初のマコーマックメダルも獲得。さらに同年11月の「三井住友VISA太平洋マスターズ」で史上4人目のアマチュア優勝を飾り、この年、本賞の特別賞を受賞している。

20年10月にプロ転向してからの活躍も目を見張るものがある。試合数の少なかつた同年秋の「ダンロップフェニックス」でプロ初優勝を飾り、21年開幕戦の「東建ホームメイトカップ」でツアー3勝目(アマ優勝含む)を挙げるという快進撃。現在、賞金ランキング4位、平均ストローク、パーキープ率でトップをキープしている。

まだ23歳だが、大舞台でも常に沈着冷静、感情をしっかりとコントロールしてプレーを続けられることが彼の最大の強みだ。大学の先輩・松山英樹の背中を追い、世界の頂点をも予感させる逸材といえるだろう。

その金谷の1年先輩に当たる片岡尚之も、有力候補として名前が挙がっている。

北海道江別市出身。札幌光星高2年時の14年、「日本ジュニア」に優勝すると、東北福祉大に進学。その在学中の19年にプロ転向した。

20年9月の「フジサンケイクラシック」でデビューを果たすと、21年5月自身4戦目となる新設大会、「JAPAN PLAYERS CHAMPIONSHIP by サトウ食品」の初代優勝者に名を刻んでみせた。最終日、首位と4打差を引っくり返す見事な逆転勝利を演じ、大きな勢いを感じさせる。21年最終盤も、勢いそのままに上位をうかがう戦いぶりが多い。

ショット、パットともに新人らしからぬ高いレベル。特にパッティングは平均パット数で上位にランキングされるなど、確かな技術で今後の可能性に期待が寄せられている。

ツアー未勝利組も有力候補が続々

ツアー未勝利ながら、ランキング上位につけている選手たちもチェックしておきたい。まずは賞金ランキング16位につけ、さらに上位進出もうかがう大岩龍一。

中学3年時に「千葉県ジュニア」で優勝。堀越高3年時の15年には初出場ながら「日本アマ」でベスト16入りを果たした。その後、日本大に進学したが2年で中退。18年に国体成年男子個人で1位となり、同年10月にプロ転向した。

プロ転向後は19年、アジアツアーの下部ツアー(ADT)「コンビファール選手権」(インドネシア)で優勝するなど、着実にステップアップ。20-21シーズンはレギュラーツアーでトップ10フィニッシュが7回もあり、ツアー初優勝も見えてきている。

バーディ率2位、トータルドライビング2位タイとなるなど、スタッツでもその実力は証明済みだ。身長182センチ、体重92キロの恵まれた体躯を活かし、初優勝を掴みたいところだ。

今回の男子ノミネート選手の中では最年少となる、大学生プロとして活躍する22歳の石坂友宏も気になる存在だ。

中学時代には「関東ジュニア」や「関東中学選手権春季大会」など、数々の大会で優勝。着実に実力をつけ、日本ウェルネススポーツ大1年時の18年に「関東アマ」を制した。19年は「日本アマ」4位、「国体成年男子」で団体・個人の2冠。さらに「日本オープン」では23位でローアマを獲得している。

19年にアマチュアのままQ Tに初挑戦し、ファイナルまで勝ち上がってプロ宣言。プロ入り3戦目となる20年の「ダンロップフェニックス」

で、当時大学4年の金谷と“学生ルーキー”同士のプレーオフを戦ったことは記憶に新しい。

まだ荒削りな部分はあるが、平均パット2位とグリーン上の巧みさが光り、賞金ランキング21位につけている。初優勝が待たれる1人だ。

最後に紹介するのは古川雄大。

福岡第一高3年時の15年と、東海大九州3年時の18年の2度「九州アマ」を制覇。翌19年にアマチュアでQ Tに初挑戦し、サードまで勝ち上がったところでプロ宣言した。

ルーキーイヤーの20-21シーズンは、「日本ゴルフツアー選手権森ビルカップ Shishido Hills」で自己ベストの単独2位に、さらに「日本プロゴルフ選手権」でも9位タイに入るなど、メジャーに強さを発揮している。

イーグル率8位が示すようにダイナミックなプレースタイルが魅力だ。その爆発力は大いに期待できる。

女子では“プラチナ世代”に注目

次に女子ツアーを見てみよう。近年、“黄金世代”を中心とした若手の台頭が著しく、この賞を受賞する選手も、女子が男子の数を圧倒している。今回は2000年生まれの“プラチナ世代”がその中心。まだまだ女子優位の状況は続いている。

そのプラチナ世代の筆頭格は、すでにツアー5勝を挙げている古江彩佳だ。

兵庫県神戸市出身、滝川第二高では安田祐香と同級生だった。その安田らとともにナショナルチームのメンバーとして活躍し、19年、19歳で挑んだ「富士通レディース」でツアー史上7人目のアマチュア優勝。その直後にプロ転向した。同年には本賞の特別賞を受賞している。

20年、プロ入り6戦目の「デサントレディース 東海クラシック」でプレーオフを制してプロ初優勝。さらに同年11月の「伊藤園レディース」、「大王製紙エリエールレディースオープン」で2週連続優勝を飾っている。

21年に入っても、「富士通レディース」「NOBUTA GROUP マスターズGCレディース」で2度目の2週連続優勝を成し遂げた。トップ10フィニッシュ12回、予選落ち0と、常に安定した戦いぶりで、賞金ランキングは2位につけている。

平均ストローク、平均パット数、パーセーブ率、イーグル数などはいずれも上位にランキング。持ち味の正確なショットを軸に今後も女子ツアーを牽引していくだろう。

ツアー4勝を挙げている西村優菜も、プラチナ世代で有力な候補選手の一人だ。

大阪府堺市出身の21歳。大阪商大高在学中の17-18年は、ナショナルチームのメンバーに選出されて活躍。16年の「全日本女子パブリックアマ」、17年の「国体」で個人・団体ともに優勝した。プロトーナメントでは16年の「日本女子オープン」6位タイ、19年「大東建託・いい部屋ネットレディース」で8位タイとなってローアマを獲得している。

日本アマチュアランキング1位にもなり、実績十分で19年プロテストに挑戦。首位と1打差の2位タイで一発合格した。

ルーキーイヤーの20-21シーズンは、20年「樋口久子 三菱電機レディース」で初優勝を飾り、21年5月の「ワールドレディースサロンパスカップ」で、早くもメジャーを初制覇。さらに9月の「住友生命Vitalityレディース 東海クラシック」、次戦の「ミヤギテレビ杯ダンロップ女子オープン」で2週連続優勝を達成した。続く「日本女子オープン」でも3週連続Vを予感させるなど、破竹の勢いだ。本シーズントップ10フィニッシュ20回の新人離れした実力で、女子ツアーを盛り上げる主役の一人となっている。

21年の「全米女子オープン」で、畑岡奈紗とのプレーオフを制して日本勢3人目のメジャー女王となった笹生優花も、2000年生まれで受賞候補選手の一人。

日本人の父とフィリピン人の母との間に生まれ両国で活躍。16年、14歳で出場したフィリピン女子ツアーで優勝、18年の「アジア大会」女子個人戦でも金メダルを獲得した。さらに18、19年「フィリピン女子オープン」を連覇し、19年の「オーガスタ女子アマ」で3位タイとなるなど、アマチュア時代の実績は十分。

19年、JLPGAのプロテストに合格すると、20年の「NEC軽井沢72」で初優勝。さらに「ニトリレディース」で2週連続優勝を果たし、潜在能力の高さを顕示した。21年には全米女子オープンを制した後、フィリピン代表として東京五輪にも出場。9位の成績を収めている。

彼女の魅力はなんといってもその圧倒的な飛距離。豪快なドライバーを武器に、日本のみならず世界での大活躍が期待されている。



片岡尚之選手



石坂友宏選手



大岩龍一選手



古川雄大選手



菅生優花選手



吉田優利選手



山下美夢有選手



西郷真央選手

まだまだ人材豊富な女子ツアー

女子ツアーには、まだまだ有力な候補がいる。現在、賞金ランキング12位につけている山下美夢有も忘れてはならない一人。大阪府寝屋川市出身21歳150cmと小柄だがショットのキレと、リカバリーの巧みさが際立つ。

大阪桐蔭高3年時の19年、「関西女子アマ」で優勝、「日本女子アマ」26位タイなどの成績を収め、11月のプロテストに合格した。

ルーキーイヤーの20-21シーズンは、序盤には予選落ちが続くなど苦しんだが、20年10月の「スタンレーレディス」で5位タイに入ると調子をつかみ、翌21年4月の「KKT杯バンテリンドレディスオープン」では、大会記録を更新する通算14アンダーで初優勝を飾った。最終日に7バーディーを奪うという圧巻の内容は、プロとして大きな自信をつかむきっかけになったはずだ。その後もたびたび上位をうかがうなど、2勝目も間近に迫る。

20-21シーズンにすでに2勝を挙げているプラチナ世代の吉田優利も要チェック。

千葉県市川市出身、現在も日本ウェルネススポーツ大に在籍する大学生プロだ。16年、麗澤高1年時にナショナルチーム入りし、輝かしい成績を残してきた。18年には米女子ツアーの「ISPS HANDA オーストラリア女子オープン」でローアマを獲得。さらに「日本女子アマ」「日本ジュニア」のアマ2冠を達成している。19年には国内メジャー「ワールドレディスサロンパスカップ」で最終日最終組も経験し、その年のプロテストに合格した。

21年7月「楽天スーパーレディース」初代女王となるツアー初優勝を飾ると、9月の「ゴルフ5レディス」で早々の2勝目も挙げた。

自身でも「マネジメント重視でスコアを作っていくゴルフ」と評するように、一打ごとにしっかりと狙いを定め、考えながら戦うのがプレースタイル。ステディなゴルフでさらなる高みを目指す。

最後に紹介するのは、麗澤高から日本ウェルネススポーツ大へ進み、吉田の1年後輩でもある西郷真央だ。

千葉県船橋市出身。アマチュア時代は「日本

GTPAルーキー・オブ・ザ・イヤー 選考基準

『男子はツアープロに転向してから、女子はプロテスト合格後またはプロテスト合格者以外ではじめにTP登録をした者でそれぞれ「レギュラーツアー」に初参戦してから最長2シーズン以内(海外ツアーを含む)、但し初年度は全試合数の三分の一以内の出場であれば、その年は含まない』かつその年度の「来季」シード権獲得者の中から、人格面並びにマナー、エチケット、話題性、将来性を加味して選考する。』

女子アマ「千葉県ジュニア」「関東高校選手権」などで優勝経験を持つ。特にノーシードでの挑戦となった19年の「日本女子アマ」は、西村、古江ら強豪を相手に最終日2位から逆転優勝。確かな実力とメンタリティを見せつけた。そして、その年のプロテストで最年少合格を果たす。

20-21シーズンは、2位が6回という惜敗が続いている。ツアー未勝利ながら、賞金ランキング5位につけている。あとは念願の初優勝を目指すのみだ。

ジャンボ尾崎ゴルフアカデミー1期生。師匠譲りのダイナミックなドライバーショットで、シルバーコレクター返上は近いだろう。ますますの活躍に注目したい。

「GTPAルーキー・オブ・ザ・イヤー」は今シーズン終了後の12月に発表される。栄誉は誰に贈られるのか。結果を楽しみに待ちたい。

※記録は10月31日現在のものです

過去10年のルーキー・オブ・ザ・イヤー受賞者

	男子	女子
2019	比嘉 一貴	渋谷 日向子 河本 結 稲見 萌寧 原 英莉花
2018	星野 陸也	小祝 さくら 勝 みなみ 松田 鈴英 新垣 比菜
2017	任 成宰	川岸 史果 森田 遥 畑岡 奈紗 永井 花奈
2016		堀 琴音 松森 彩夏 ささき しょうこ
2015	今平 周吾	藤田 光里
2014		渡邊 彩香 鈴木 愛
2013	松山 英樹 川村 昌弘	比嘉 真美子 堀 奈津佳
2012	藤本 佳則	成田 美寿々 青藤 愛璃
2011	黄 重坤	
2010	園田 峻輔	藤本 麻子

※敬称略